

## リチャルド・カンチロン『商業一般論』の研究(下)

伊藤久秋

## 十四、貨幣増加の結果

カンチロンが貨幣流通の不平等を以て、諸國の比較的勢力の不平等を決する原因なりとし、又諸國の比較的富は其各の有する貨幣の量にありと (je suppose toujours que la richesse comparative des Etats consiste dans les quantités respectives d'argent qu'ils possèdent principalement p. 244) なした理由は、次の二點に在る。(一) 第一に土地及勞働の價值は貨幣を以て表はさるが爲に、貨幣の最多量なる國は其物價最も高い。此事は一國をして一アルバンの土地の產物を與へて二アルバンの土地の產物を受取り、一人の勞働に對して二人の勞働を受取るの地位に在らしむるものである。第二に貨幣多き時は一國政府の收入は容易且多額に徴收され、以て戰爭其他の場合に外國に對して有利な状態にある。(pp. 249—251)

併しカンチロンは無條件の貨幣増加論者ではない。貨幣増加の影響に關し

て彼の説く所が此事を示してゐる。彼によれば、一國に金又は銀の鑛山が發見さるゝ時は鑛山の所有者及鑛山に働く企業者及勞働者は、之が爲に富裕となり、その程度に應じて貨幣の支出額を増加すべく、又貨幣の一部分は利子を取つて他人に貸さるゝに至るべく、かくて一國の貨幣の流通量は増加し、食料及製造品の價格は騰貴する。彼は貨幣の多きこと、又は其増加は凡ての價格を高からしむるに就ては何人も異論なしとし、二世紀間亞米利加より歐洲への銀の流入は此眞理を實證してゐると稱し、<sup>(2)</sup>次に、然らば貨幣の増加は如何にして物價騰貴を起さしむるかを説明した。貨幣の増加が金銀鑛の發見によつて生ずる時は前に述ぶるが如く鑛山の持主、企業者、鑄物師等一般に鑛山に働く凡ての者は其生活費を引上げ、從來より多くの肉を食し、葡萄酒又は麥酒を飲み、上等の衣服を着け、上等の家に住むに至り、其結果として勞働者の或者は從來よりも多くの職を見出すことゝなり、従て此勞働者が又其生活費を引上げる。かくて此等の物の價格は騰貴する。價格の騰貴が或農夫をして、此等騰貴せる物の生産に力をそゝがしめ、従て此農夫の利益は増大し、その消費支出額も増加する。併し此物價騰貴の爲に先づ第一に不利益を受くる者は、地代の確定せる地主及其下

僕類、賃銀の確定せる勞働者其他であつて、此等の者は從來の消費を縮少するの餘義なきに至り、或者は生活難の爲に國外に移住する。地主は其使用人の幾莫かを解雇し、使用人中の或者は賃銀の値上を要求する。鑛山より生ずる莫大なる貨幣の増加は、此の如くにして、一方消費の量を増加すると共に他方住民の數を減少せしめる。此貨幣の増加が更に繼續する時は地主も其地代を引上げ、其使用人の賃銀をも増加するに至るが、物價の高きことゝ勞働の高きことは、外國品の輸入を來し、之が爲に國內の職人及製造業者の職は奪はれる。外國品の輸入は當然に外國に對する支拂の必要を來し、鑛山の生産物たる貨幣は必然に外國に向つて流れ、之が爲に一國は貧乏となり、或點に於て外國に對し從屬的地位に立つに至る。折角の鑛山の勞働は之に従事する者と、此外國とを利益するに過ぎざることゝなる。これ印度の發見以來の西班牙、ブラジル金山の發見以來のポルトガルの運命であつた。(pp. 211—220)

若し貨幣の増加が外國貿易の差額によつて生ずるならば、此年々の増加は多數の商人、企業者を富ましめ、職人勞働者に職業を與へる。其結果は此等の者の消費を増加し、土地及勞働の價格は騰貴する。此場合外國より餘分の食料を輸

入するにあらざれば、一國の住民の數は減少する。實際に於ては、貨幣の多いことは、貨幣少き隣國(從て物價低き)より多量の輸入を來し、之が爲に貿易の差額は小となる。外國よりの輸入の増加することは、其外國に内國と同様なる製造業其他の事業を起す結果となる。(pp. 220—224) (8)

貿易の差額の外、一國の貨幣を増加する原因には、外國の支拂ふ補償金、外國の使節又は旅行者の費用、宗教自由其他の理由による外國移住民の齎す財産等があり、之が又物價の騰貴を來すことも同様である。(p. 226—227) (9)

一國の貨幣の増加を圖る方法には右述せるが如く種々あるが、カンチロンはその中最も主なるものは貿易の差額による方法なりとし、一國が最も確實に勢力を加へる方法は之であるとなすのであるが、(p. 226) 併し——以下彼は貨幣の過剰が如何なる弊害を來すかを説明する——前にも云ふが如く此貿易の差額は永續するものではない。蓋し貿易の差額による貨幣の流入は勞働の騰貴即ち物價の騰貴を來し、物價の騰貴は外國より食料、製造品の輸入を増加し、終には内國と同様の産業が外國に起るに至り、勞働者及職人は職を求めて外國に去り、一國の輸出貿易は萎微するからである。貨幣流入の爲に助長された贅澤の風

が改まらずして外國より贅澤品の輸入繼續する時は、國內の貨幣は外國に流出することとなり、一國は強國より弱國にかはる。すなはち、貨幣の過剰なることは一國を自然に *Pin digence* (窮乏) に陥れる。故に貿易の爲に貨幣が多量に流入し、物價が著しく騰貴する場合には君主又は政府は其貨幣を流通外に引上げることで策の得たるものであるが、之が適當なる時機を見ることが困難であるのみならず、此等の知識なき君主及政府は、寧ろ反對に勢力の擴張、外國の討伐を企てる。此等の事は一國の崩壊を早めるのである。(pp. 244 ff.) 外國より資本を借ることは一時的景氣をそゝるが、之が爲、外國に對し從屬的地位に立つのみならず、外國に對する利子の支拂を大にし終には資本をすら支拂ひ得ざる状態に陥るの虞あり、戰爭に依て外國より償金を取ることは確實に貨幣を増加する方法であるが、併し此方法を用ひた凡ての國は、曾て商業に依て榮えた諸國と同様に、皆衰亡し去つたものである。例へば羅馬は此方法によつて富んだが、贅澤の結果は未だ其領土を失はざる前に貨幣を失ひ、之が爲に衰亡した。カンチロンは茲に、恰も道學者の口吻を模するが如くして、曰く “Voilà ce que le luxe causa, et ce qu'il causera toujours en pareil cas” (p. 263)

カンチロンの國家衰亡循環の説は、David Hume の貨幣論に述べる所と對比することが出来る。(5) 又彼の説は佛蘭西の Mably 及び Graslin によつて引用された。すなはち、マブリは其 *Principes des négociations, pour servir d'instruction au droit public de l'Europe* に於て、贅澤は貿易にとり有利ならざるのみならず、來るべき衰退の徴候であると言き、カンチロンのエッセイを掲げ、又其 *Entretiens de Phocion* の脚註に、カンチロンの説を詳しく引用し、且カンチロンに對する不満を述べて云ふ、若しもカンチロンが富と商業の結果のみを考察することなく、社會全體を觀察したならば、恐らく彼は過大の富によつて、其財政を破壊された一國が、更に年々貿易の差額を有利にすることに熱中することなく、寧ろ此機會に於て、贅澤貪慾を抑壓する様に勸告したであらうと。富と貧との循環を説くカンチロンの説の結論として、マブリは、結局貧乏を招來すべき富を獲得する方法を以て、國家幸福の原理とする政策は謬りではないか、眞の政策は、より恆久的なる幸福を欲する。(La vraie politique veut une félicité plus durable) と述べた。グラスランはマブリの *Entretiens de Phocion* によつて、カンチロンを孫引し、カンチロンの觀察の明敏を稱揚したが、(Rien de plus judicieux que l'observation de M. Cantillon) 併し又カンチロンが強

國没落の原因を示すを以て満足し、之を豫防する方法を述べなかつた事に不満を述べた。

實際政策家としてのカンチロンの見解は明瞭ではないが、彼が無條件の貨幣増殖論者でなかつたことは、上述の所で明白である。

註(1) 彼は又他の個所に曰へ“Après tout, il me semble que la puissance et la richesse comparatives des États consistent, tout autres choses étant égales, dans la plus ou moins grande abondance d'argent qui y circule, hic et nunc.” (p.

252)

(2) 十六十七兩世紀の歐洲の物價騰貴を亞米利加よりの銀の流入によつて説明するに至るまでには、此點に就て多くの異論のあつた事は歴史上の事實である、興味あるのは、スミスもカンチロン同様、此點異論なしと云つてゐる事である。

“The discovery of the abundant mines of America seems to have been the sole cause of this diminution in the value of silver in proportion to that of com. It is accounted for accordingly in the same manner by everybody; and there never has been any dispute either about the fact or about the cause of it.” (Bk. I, ch. XI)

『十六七世紀の價格革命』の歴史家ウキーペがスミスの右の一節に就て云へる所は、從て又カンチロンにも通用する。『併し右の一節を書くことが出来、此中に表はされた見解が一般に受取られ、確定的になるまでには、長い年月を要し、價格大革命が遠く終結し去つた後の事であつたのである。』(Wiebe, Geschichte der Preisrevolution, Leipzig, 1895, s. 183)

(3) 次に彼は海運國が運賃低き點に於て外國に商品を輸出する上に有利な地位にあり、貨幣の多量なる爲、物價高く

とも、よく之を償ふに足る場合あること、英國は此有利なる状態に在りと述べる。(p. 224—226)

(4)

カンチロンは貨幣の増加に正確に比例して、凡ての價格が騰貴すべしと云ふのではない。彼は注意深く、貨幣を二倍するも必しも物價は二倍するものにあらざることを附言する。彼の次の比喩は甚だ妙を得てゐる。“Une Rivière qui coule et serpente dans son lit, ne coulera pas avec le double de rapidité, en doublant la quantité, de ses eaux.” (p. 235) 更に彼は云ふ。物價騰貴の程度は貨幣の増加が消費と流通を促進する度合に應ずるものである、而て又消費の増加は凡ての食料と製造品に同一の程度に及ぶものではない、故に市價の騰貴は或物に於て高く或物に於て低いことになる。(p. 236) 英國に於て肉の價格は三倍し、小麥の價格は四分一騰貴するに過ぎないことがあり得る。其故は小麥の輸入は許されてゐるに拘らず牛の輸入は禁ぜられてゐるから、英國内に流通する貨幣の量が如何に増加するとも、小麥の價格は外國と比較して運送費以上に騰貴しないであらう。(p. 236)

彼は一國の貨幣の多寡を見るには地代の高低を見るものが最便宜であるとなす。すなはち他の條件同一なる限り、地代が高いところは貨幣の多い證據であり、之が低いところは、その少い證據である。(p. 247)

(5)

Where one nation has gotten the start of another in trade, it is very difficult for the latter to regain the ground it has lost; because of the superior industry and skill of the former, and the greater stocks, of which its merchants are possessed, and which enable them to trade on so much smaller profits. But these advantages are compensated, in some measure, by the low price of labour in every nation which has not an extensive commerce, and does not much abound in gold and silver. Manufactures, therefore gradually shift their places, leaving those countries and provinces which they have already enriched, and flying to others, whither they are allured by the cheapness of provisions and labour; till they have enriched these also, and are again banished by the same causes. And, in general, we may observe, that the dearthness of every thing, from plenty of money, is a disadvantage, which attends an established commerce, and sets bounds to it in every country, by enabling the poorer states to undersell the



richer in all foreign markets. (Hume, Essays, moral, political and literary, pt. II, of Money, pp. 310-311, London, 1912)

## 十五、利　子

カンチロンの利子論は第九章第十章に展開さる。一國に於ける貨幣の利子 *intérêt* は、市場に於る凡ての價格が賣手と買手の數字的割合によつて定るが如く、貸手と借手の數字的割合 *proportion Numérique* によつて決定さる。(p. 264) 然らば利子は如何にして存在するか。カンチロンの此問に對する答は二段に分つことが出来る。第一段に於て彼は曰く、利子は人の必要によつて存在するに至つたものと思はれる、すなはち十分な質又は土地抵當をとつて貨幣を貸す者と雖、少くとも借手の怨費用、訴訟及損失の危険を冒かす、若し何等の擔保を取らずして貸す者に至つては全損をするの危険を負擔する。茲に於て、最初借手は一の利潤 *profit* (此利潤は借手の必要と貸手の危虞及貪慾に比例する) を提供して貸手を誘ふの要があつたのである。これカンチロンの見て利子の第一原因 *la première source* とするものである。(p. 265) 併し彼は之を以て満足せず更に説いて曰

く第二段利子の取得が絶えず行はれる所以は企業者が之より獲得し得る利潤に基く。土地は人の勞働の助を籍り、豐度、人の勤勉の度合に應じ、播種せる小麦の四十、五十、百、百五十倍を産出する。而て此土地產物の中、普通三分の一を地代として地主に拂ひ、勞働を爲す農夫が三分の二を受取るものである。すなはち、其中の半分は、彼の費用及生活維持費、他の半分は彼の企業の利潤である。

(p. 266) 今此農夫が其企業に必要な資本 *fond* を有する時は、換言すれば、必要な器具、馬等の凡てを有する時は、彼は第三の部分全部を受取るが、併し、此資本を他より借りる場合には第三の部分全部を貸手に提供し得る地位にあるであらう。(p. 267) (1)

第一段に於て、彼は貸金利子の成立を説明し、第二段に於て本源的利子 (*der ursprüngliche Kapitalzins*) の成立を述ぶるものと云ふことが出来る、而て此第二段に於て彼は明に、地代賃銀と區別されたる資本利潤としての利子の存在を示せるものである。此點に特に注意を要する、何となれば、學說史上チネーですら、なほ此點を明瞭にしなかつたからである。(2) 又利子の起因に關する生産力説の萌芽が彼の說に含まれてゐると云ふことも出来る。併し彼がなほ、此等の思想を進

めて、深く本源的利子を考察する所なく、主として貨金利子を眼中に置いたのは、當時の學者として已を得ないと云ふべきか。彼が『貨幣の利子』なる言葉を用ひ、利子學說史上の初期の學者と等しく貨幣の一定額と資本との區別を明瞭にしないのは此爲である。それでも彼は Locke, Montesquieu, Law 等に反して貨幣の増加が利子の低下を來すと云ふ說を反駁してゐるのは注意を要する。彼は、その例として一七二〇年殆ど英蘭の全貨幣が倫敦に集中したるに拘らず、利子は下落せざるのみか 5% より 50% 又は 60% に騰貴したる事を挙げ、その原因として、南洋會社の計畫が國民の射利心をそゝり、貨幣の需要を多くした事を挙げる (pp. 282 中) 彼の論據は、貨幣に對する需要供給の關係が利子の高低を決定すると云ふに在る。彼は結論を述べて云ふ、『一國に於ける貨幣の豊富又は不足は常に取引中に在る凡ての物の價格を騰貴し又は低下せしむるも、何等利率 le prix de l'intérêt と必然的關係をもたない、利率は貨幣の豊富なる國に於て高きこと、在り得ると共に、貨幣の少き國に於て低きことが在り得る、物價の高き國に於て高く、物價の低き國に於て低く、倫敦に於て高く、ゼーヌに於て低きことが在り得るのである』と。 (p. 285) 彼が此正しき結論を導くに當つて、貨幣の一定額と資本との區別、利

子は貨幣の利子にあらずして、資本の利子なる事を、論據としなかつたのは遺憾とすべきである。此學問的事業は彼より以前(一六九〇年)Nicholas Barbonが既に着手し、後年、チュルゴー、ヒュームを選、スミスによつて達成されたる所のものである。(8)

次にカンチロンは、貸金が借手の生活費に比較して大なれば大なる程貸金は安全であるとする。すなはち商品を速に賣らざるべからざる小商人には破産の危険多く、從て此等の階級に對する利子は高く、富裕なる商人(Négocians riches et réputés solvables)に至つて最低い。一國の市場利率(Le prix courant de l'intérêt)と人の稱するものは此後者であつて、土地抵當の場合の利率と變りないものである。(pp. 271—280) 彼は更に、利子が借手の安全の度に關する單なる風評によつて日々上下すること、一國の利子が常に高い不斷の原因は君主地主其他の富裕者の支出の大なることが企業者の貨幣に對する需要を増加することにあること、戦争が種々の新企業を起し且企業の危険と大にすることによつて利子の昇上を來すことを述べる。(p. 285)

利率の決定に關して彼は自由主義者である。彼は到底 Joshua Child 其他の説

に同意するを得なかつたと思はれる。彼は商業の事に通せざる門外漢が利子に就て規定を爲したことを難じてゐる。“Rien n'est plus divertissant, que la multitude des lois et canons qui ont été faits dans tous les siècles au sujet de l'intérêt de l'argent toujours par des sages qui n'étaient guère au fait du commerce et toujours inutilement.” 然らば若し法律を設くる場合は如何にすべきか。『一國の王侯又は爲政者が法律によつて、市場利率を規定しようとする時は、最確實なる階級に於ける市場利率、或は大體之れに基いて規定しなければ法律は無益となるであらう、蓋し取引者は取引の法則或は借手と貸手との割合によつて定まる市場利率に従つて、祕密取引を行ふに至るであらう、かくて此の如き法律の制限は商業を妨害し、利率を確定するどころか、却て之を上騰せしむるの結果を來すに過ぎなからう』(p. 292) 利率は需要と供給との關係に由て定まる、之を法律で定むることの不當なるを信するカンチロンの精神は、又後年チュルゴ―及スミスの精神であつた。

カンチロンは利子に關する論述の終りに於て、利率が土地の價格の標準となることを指摘した。『一國に於ける市場利率は土地賣買の價格に對する基礎となり標準となるの觀がある。若し市場利率が百分の五即ち二十分の一である

ならば、土地の價格も同様でなくてはならぬ、併し土地を所有する事は一國に於て一の地位と或種の權限を與ふるが故に、利子が二十分の一である場合は、土地の價格は二十四分の一又は二十五分の一 (*denier vingt-quatre ou vingt-cinq*) に相當する……』と。(筆者註、土地價格は一ケ年の地代の二十四倍又は二十五倍に當るの意) (pp. 294—295) 興味ある事は、アダム・スミスもカンチロンと同様に利子の一章を終るに當つて、此關係を指摘した事である。彼は曰く『土地の普通市場價格が何れの地に在つても、普通市場利率に基いて定る事は注目す可きである。蓋し資本を有する人にして、躬ら是を使用するの勞をとらずして、是より一所得を收得せん事を欲する者は、此資本を以て土地を購ふ可きか、將或は利附にて是を貸付けた方がよいかと熟考するものである。そこで、土地の優れた安全性と殆んど何れの所に在つても此種の財産に伴ふ或他の若干の利益とは、總じて彼をして彼の貨幣を利附にて貸付けるに依り獲得し得可き所得よりも尠い所得を土地より獲る事を以て満足する様な意嚮を懷かしむるであらう。此等諸利益は此兩所得の間に存する或程度の差異を補償するに足るのであるが、しかしそれは只或程度の差異を補償する丈けであらう。それで、若も地代にして之より

も更に大なる差異で貨幣の利子の下に降る様であつたならば、何人も土地を買はぬであらうし、従つて其爲めに土地の普通價格は間もなく低落するであらう。之に反して此等の諸利益にして此兩所得間の差異を補償して尙且つ大に餘りあるならば、各人悉く土地を買ふであらうし、かくてやがて再び土地の普通價格を昇騰せしむるであらう。即ち利子が一割であつた時には、土地は通常其の十ヶ年乃至十二ヶ年間の所得に相當する價值を以て賣られた。(land was commonly sold for ten and twelve years' purchase) 然るに利子が六分五分四分と低落するに従つて、土地の價格は二十ヶ年二十五ヶ年三十ヶ年間の所得に相當する價格に昂騰した。』(W. of N. BkII. Ch. IV Cannan's ed Vol. I. p. 339 竹内謙二氏譯第一卷六四三—四頁の譯文を用ふ) 對照して之を見る時、スミスの説は簡單なるカンチロンの説の敷衍に過ぎないことを見出すであらう。(5)

註(1) 彼は又曰く新企業家が種小麥又は畜類を信用で買ひ農場の産物を賣つた時に返還する約束をする場合には彼は此小麥及畜類に現金値よりも高い價格を甘んじて提供するであらう。而て此方法は要するに此等のものを現金で買ふ可く現金を借り、之に對して現金値と信用値との差額を利子として與ふ場合と同じ事である。(pp. 267—268)

(2) Böhm-Bawerk, Kapital u. Kapitalzins, I. Bd. s. 51 參照。但ヒームはカンチロンに就て述ぶ所なり。

(3) ヒュムン曰く Interest is the Rent of Stock, and is the same as the Rent of Land, ..... Interest is commonly

reckoned for money; because the money Borrowed at Interest is to be repayed in money; but this is a mistake: for the Interest is paid for Stock: for the money borrowed, is laid out to buy Goods, or pay for them before bought: no man takes up money at Interest, to lay it by him, and lose the Interest of it. (a Discourse of Trade, London, 1690, pp. 31-32) ① *リチャード・カンチロン*は尙貨幣の利子(Interest de l'argent)又は貨幣の價格(Le prix de l'argent)なる語を用ゐず(『Réflexions, 2 LXXIV ff. ed. Daire p. 47-』)利子を生ずるは價值の一定額なりと云ふ Locke, Law, Montesquieu の誤解を脱す。 “ Dans le prêt à intérêt, l'objet de l'appréciation est l'usage d'une certaine quantité de valeurs pendant un certain tems. ” (2 LXXVIII, ed. Daire p. 54) ② *リチャード・カンチロン*は *Essays, moral, political and literary*, Pt. II. Of Interest pp. 320 ff (ed. 1912) に述ぶ所 *スミス*に於ては *Bk. II. Ch. IV* を引く可し。 *ヘンリー・スミス*共に、貨幣の増加が利子低落の原因なりとする説を強く論破す。貨幣は——*スミスの言葉を用ふれば*——資本の deed of assignment に過ぎず、資本は貨幣の價值又は之を以て買ひ得べき財である。資本の増加は其價格即ち利子を低下すべし、貨幣の増加は貨幣價值の低落を伴ふ限り、毫も資本の増加を意味するものではない、従て利子の低下を來すものではないからである。

- (4) *リチャード・カンチロン*は利子は需要供給の關係によりて定まることを論據より、是を法律を以て定むべきものと思ふ事の誤謬なるを指摘する。 “ .....le prêt à intérêt n'est exactement qu'un commerce dans lequel le prêteur est un homme qui vend l'usage de son argent, et l'emprunteur un homme qui l'achète, précisément comme le propriétaire d'une terre et son fermier vendent et achètent respectivement l'usage du fonds de terre affermé. ” (Réflexions, LXXII ed. Daire p. 46) “ Ainsi, quand il y a beaucoup d'emprunteurs qui ont besoin d'argent, l'intérêt de l'argent devient plus haut; quand il y a beaucoup de possesseurs d'argent qui en offrent à prêter l'intérêt baisse, C'est donc encore une erreur de croire que l'intérêt de l'argent dans le commerce doive être fixé par les lois des princes: c'est un prix courant qui se règle de lui-même comme celui de toutes les autres marchandises. ” (LXXV, p. 48)



スミクニ貸シテ Bk. II. Ch. IV (Cannan's ed. p. 338) 條に "In countries where interest is permitted, the law, in order to prevent the extortion of usury, generally fixes the highest rate which can be taken without incurring a penalty. This rate ought always to be somewhat above the lowest market price, or the price which is commonly paid for the use of money by those who can give the most undoubted security."

- (9) 貸付の利の高低、利率の増減のヲ總ビテ、高利中へ入ルニ付、Bacon 氏 Essay on Usury (1612) に於テ、高利は市場の價格を越スルハ、カペル 氏 "The high rate of Usury makes Land sell so cheape" (a Tract against Usury, 1621) 云、Barbon 氏 著シタル諸書ニテ、"Interest is the Rent of Stock, and is the same as the Rent of Land,.....It (interest) is the measure of the value of the Rent of Land, it sets the Price in Buying and Selling of Land: For, by adding three years Interest more than is in the Principle, Makes the usual Value of the Land of the Country; the difference of three Year is allowed; Because Land is more certain than Money or Stock. Thus in Holland, where Money is at three per Cent. by reckoning how many times three is in a Hundred Pounds, which is thirty three; and Adding three Years more; makes Thirty Six Years Purchase; the Value of tha Land in Holland;" (A Dis. of Trade, pp. 31-33) 以下、高利は、ノハトコハ、ノハノ 氏 Sir Dudley North 氏 (Discourses upon Trade, 1691-MacCulloch's Reprint p. 517) 云、"But as the Landed Man lets his land, so these still lett their Stock; this latter is call'd Interest, but is only Rent for Stock, as the other is for Land," Sir W. Petty 氏 A Treatise of Taxes (1667) に於テ、高利は、貸付の利の増減ナド、"As for Usury, the least that can be, is the Rent of so much Land as the money lent will buy, where the security is undoubted; but where the security is casual, then a kinde of ensurance must be enteroven with the simple natural Interest, which may advance the Usury very consconably unto any hight below Principal it self." p. 48 (Economic Writings of Sir W. Petty) Locke 氏 云、"it follows that Borrowing money upon Use is not only by the

necessity of Affairs, and the Constitution of human Society, unavoidable to some Men, but that also to receive Profit for the Loan of Money, s as equitable and lawful, as receiving Rent for Land.....(Some Considerations of the lowering of Interest and Raising the Value of Money, London, 1692, pp. 55—56) 併し彼は地代の利子の平行的運動を否定した。(pp. 58 ff) Sir J. Child は利子を低下すれば地價を騰貴せしめ地主なも利益す可しと云つた。(A Discourse about Trade, 1690, pp. 222—) ナムローは資本利子の存在を説明するに地代の存在を以てした。(Böhm-Bawerk, Kapital und Kapitalizins Erst. Abt. s. 75ff. 參照) 又曰へ Le prix courant des terres se règle ainsi par la proportion de la valeur du fonds avec la valeur du revenu..... (Réflexions, 2 LVIII ed. Daire p. 36) 併し土地の所得は安全の度合大なるため利子より幾分低しと云ふ。(2 LXXXV, ed. Daire pp. 56—57)  
尙 G. Cassel, The Nature and Necessity of Interest, London, 1903 pp. 9 ff. 參照。

## 十六、外國貿易

彼が第三篇の劈頭外國貿易の一章に於て述ぶる所は、主として既に述べたる所の反復であるが、彼のメルカンチリスト的傾向を證するものとして甚だ注目し値するが故に、其大要を紹介する。

Brabant の住民が佛蘭西の Champagne の酒を買ひ、其レースを之に賣る場合、兩者の價格が共に銀十萬オンスであり、従て手形に由て貸借相殺され何等銀の流出入を生ぜざる場合と雖、佛蘭西は此貿易に於て不利益の地位に在る、其故は酒の

製造に多くの土地を要しながら、レースに比較して其價格低いからである。一國の土地及勞働の價格が高い時は、少き土地と勞働との產物を以て、多き土地と勞働との產物を買ふことが出来る。これ貨幣の流入に伴ふ利益であつて、一般に製造品を外國に輸出することは國家にとつて利益である、蓋し此場合には國家に有要な勞働者を外國が養つて呉れる状態に在るからである。而して外國よりの支拂は正金によるを最良しとするが、然らざる場合には勞働量の加はること最少き土地產物を外國より輸入することである。此の如くして殆ど何等の土地產物を有せざる國が外國の負擔に由て、多くの人口を養ふの例は屢々見る所であるとし、之が爲に一國はなるべく製造業を獎勵し、なるべく多くの金銀を受取らねばならないとする。“Pour y parvenir par le commerce avec l'Etranger, il faut encourager, tant qu'on peut, l'exportation des ouvrages et des Manufactures de l'Etat, pour en retirer, autant qu'il est possible, de l'or et de l'argent en Nature.” (pp. 309—310) 若し一國に消費額以上の農產物の餘剩ある時は、外國に之を賣て其價格を金又は銀で受取るを宜しとする、蓋し金銀は農產物の如く腐敗せず、之を貯る時は必要に應じて常に外國との交換に充て得るからである。前に述べるが如く金銀の流入は永續

することは出来ないが、併しその續く間は、一國に對して有利であるとし、進んで和蘭が印度の衣服類を輸入して更に之を獨伊西班牙亞米利加等に賣るのは、彼の國にとりて有利であるが、衣服類の生産ある英佛が之を模倣するのは過りである、假令印度の製品より高價であるとも、住民が外國品を使用しない様にすべきである。(pp. 315—317) かくて又彼は海通を發達させることの一國にとり有利なることを述べ、此點に關する英蘭の政策を褒め、此一章を終るに次の一節を以てした。

『茲に於て予は次の事を述べて結論としたい、一國の勢力の増進又は減退の爲に國家にとり最重要なる商業は外國との商業であつて内國の商業は政治上さほど重大なるものではないこと、外國貿易は、國家の自然的大商人、船舶及船員労働者及製造業者を増加する、若し之が支持を特に留意せざる時は、半分しか之を維持するを得ざること、殊に、外國に對する差額を維持することを常に心掛くべきこと、是である。』(pp. 322—323)——純然マールカントリスト的論調たることを否定することは出来ない。

## 十七、爲替

次章(第二章)に於て彼は爲替の作用を説明する。其簡潔にして巧妙なる説明は恐らく爲替に關する如何なる新刊書にも劣らない。

彼は先づ金銀輸送の危險と費用とを述べ、之を避くる方法として爲替手形的作用を説く。『今マルヌ河畔 Châlons 市が年々王室農場の徵收人に一萬オンスの銀を支拂ひ、他シャロン又は其附近の葡萄酒商人が、其取引先を通じて、巴里に銀一萬オンスの價值のシャンペン酒を賣るとする。若し一オンスの銀は佛蘭西に於ける商業上、五リーブルに相當するとすれば、前述の一萬オンスは巴里に於ても、シャロンに於ても、つまり五萬リーブルに相當する。此例に於て王室農場の徵收人は受取つた五萬リーブルを巴里に送るを要し、シャロンの酒商人の取引先は五萬リーブル(賣上高)をシャロンに送るを必要とする。此際兩者相議し、協約する時は、此二重の貨幣の使用又は運送を、一の相殺に由て、或は所謂爲替手形に由て、節約することが出来る。すなはちシャロンの酒商人の取引先は五萬リーブルを巴里に於ける王室農場出納係に携ふる時は、出納係はシャロンの農

場徴收人に宛てたる一通若くは數通の指圖書或は指圖拂の爲替手形を與へる。然る時は酒商人の取引先はシャロンの酒商人に此手形を裏書即ち移轉すると、此商人はシャロンに於ける徴收人の許に至つて五萬リーブルを受領する。

此の如くして巴里に送る可き五萬リーブルは巴里の農場局の出納係に支拂はれ、シャロンに送る可き五萬リーブルは該市の酒商人に支拂はれる。此爲替或は相殺に由て一市より他市へ貨幣を送るの煩勞を節する。』(pp. 325—327)

彼は、かくて此場合の如く一オンスと一オンスとが相殺さるゝ時、爲替は『*au pair*』なる事を述べ、兩市の取引が大なる時は、爲替の事業は銀行の設立に由て行はるゝことを説明し、兩市の支拂一致せざる時は、爲替は *pair* の上下に移動することを述べる。例へば巴里の取引先がシャロンに向つて餘分の金額を送る必要ある場合、彼は之を銀行に携ふる時、銀行は之に答へてシャロンに資金を有せざること、又資金を徴達する機會を持たざることを告げ、併し若しも彼が百リーブルの手形に對して三リーブルを餘分に支拂ふならば爲替手形を賣る可きことを申出るであらう。然る時商人は百に對して一又は二の率を申出で、結局二半の率が兩者の間に決定され、此率を以て銀行は商人にシャロンの取引

銀行に宛て、十日又は十五日期限附のすなはち取引銀行に、此金額支拂の餘裕を興へる爲手形を發行することとなる。(pp. 329—333)

次章に於て彼は、三國間の取引が何等正金の輸送を要せずして爲替により決濟さるゝことを述べ、次に銀行は爲替の變動を豫想して、利益し得ることを説明する。例へば今一月に英蘭は和蘭に對して貿易の差額五萬オンスを支拂ふべき立場にありとすれば、倫敦に於けるアムステルダム宛の爲替はバー以上に昇る。此際銀行家が和蘭に此差額を送る時は爲替は又バーに還る譯であるが『英國の銀行家が、和蘭に對する莫大な商品の輸出あることを、一月に於て豫想し、其結果三月に於て之が賣却され支拂さるゝ時に際して和蘭は巨額の債務を英蘭に對して負ふ可きことを豫想する時は、彼は一月に和蘭に送る可き五萬 écus 又はオンスを送らずして、二ヶ月期限附のアムステルダム取引先宛の爲替手形を提供することが出来る。此方法により一月にバー以上であり、三月にバー以下であるべき爲替によつて利益を収めることが出来る、換言すれば和蘭に何等の送金をせずして二重の利益をすることが出来るのである』(pp. 342—343) ゼボンスは此一節を引いて、*'an explanation of speculation in the exchanges, which might be*

mistaken for an extract from Mr Groschen's admirable treatise" (p. 172) と讀した。

カンチロンは、上述の如き銀行家の投機が貿易の差額と獨立に、短期間に於ける爲替の變動を屢々引起す原因であるが、爲替の變動は結局は此差額に由て支配さるゝものであり、銀行家の投機と信用は、一都市一國より他方他國への金額の運送を延期することは出来ても、貿易の差額は結局は正金によつて支拂はれねばならないことを附言する。(pp. 343—344)

貿易の差額の外、彼は爲替の變動、政治上、軍事上の送金、旅行者の費用、外國への投資、之より生ずる資本利子の取得等に依て發生することを認むるが、只此等は偶然的原因であつて、問題の複雑を避くるため、彼は商業の觀察點に限局することを斷つて居る。(pp. 348) 次に爲替の變動は、貨幣の輸送費の大小及其危險の程度に應ずるものである。(pp. 350—351)

最後に彼は金銀の輸出禁止が如何なる結果を來すかを考察する。今葡萄牙が英蘭より多くの商品を買ひ、貿易の差額を支拂ふべき状態に在るとする。茲に葡萄牙王が金銀の國外への輸出を嚴禁する時は、英國の商人は商品の代價を受取るを得ず、今後商品を葡萄牙に送らざることゝなり、其結果彼の國に於ける



英國商品の大騰貴となる。今葡萄牙の貴族其他英國民を缺き得ざる者が之に對して普通の二倍までの價格を提供するとすれば、此騰貴は禁を犯して英國に金銀を送る者の利潤となる。之は金銀の密輸出を獎勵する。(註)かくて此種の法律は却て葡萄牙にとり不利益の結果を來す、蓋し金銀の密輸出によつて利益したる者は自然其利潤をも外國に送る可く、屢々自身其金銀を携へて外國に出ることゝなり、以て然らざる場合よりも多くの金銀が外國に出ることゝなる。嚴罰の實行を益々密輸出をして報酬の増加を要求せしめ、以て外國に出る金銀を却て多くするのみである。金銀を一國に保持する唯一の方法は貿易が一國に逆とならざるよう、外國貿易を行ふの外にない。(pp. 35—35)『苟も實際に關し多少の知識を有する者には、是れくらい了解し易いことは無い、從て此等の有識者が、國家を指導し又諸大王國の財政を司る者が、地金銀及金銀貨の輸出を同時に禁止する程、爲替の性質に關し無知識なることを驚嘆せるは尤な事である。』(p. 355)——彼の初期マーカンチリストに對する批評と見る、ことが出来る。

(註) スミスも金銀輸出禁止の效果なきを云ふ、*“But having no employment at home, it will, in spite of all laws and prohibitions, be sent abroad.....”* (Bk. II, Ch. III, Cannan's ed. Vol. I, p. 322)

## 十八、貨幣金屬及貨幣の比價、貨幣額面價額の變更

彼は貨幣に用ひらるゝ金屬が價値を有するは、其存在少くして之を採取するに勞働を要する爲なることを説明する。此點は彼の價値説を見る際に注目すべき所である。すなはち曰く『若しも金屬が、水の普通然るが如く、たやすく見出せるものであるならば、各人その欲するまゝにとるべく、從て此等の金屬は殆ど價値をもたないであらう。最も存在すること多く、最も生産に勞苦を要せざる金屬は又最も安い金屬である。鐵は最も有用であると思はれる、併し歐洲では銅よりも少い苦痛と勞働とを以て普通に之を見出すが故に、遙に安價なのである。』(pp. 355—56)——スミスの貨幣金屬の價値は、主として其の scarcity と之を獲得する爲の labour and expence により生ずると云ふ説明並に、使用價値と交換價値との比較と相對照すべき一節である。(1)

次に銅貨と銀貨の價値の比例が羅馬時代以來變遷し來れる事を述べ、銀に對する銅の市價が法定比價と隔離せることに及ぶ。併し小取引の爲の此小貨幣(銅)一國內に過剩に存在せざる時は銅純銅又は合金銅貨は其内部的價値不足す

るにも拘らず困難なく通用する。併し之を外國内に通用せしめようと欲する時は、最早銅の重さ及銅と混せる銀の重さ以上には受取られない。又一國內に於ても爲政者の私慾又は無智に依て小取引の爲の此小貨幣が過剰に通用せしめられ、且或程度之を巨額の支拂にも用ひ得ることを定むる時は、世人は最早之を進んで受取るを欲せず、こゝに小貨幣と銀貨との間に打歩が生ずるに至る。

(p. 360) 銅と銀との關係と同じく銀と金とも、相互の價值は國により時代によつて同一でない。銀は金よりも多量に産する爲、其價值は常に低いが、兩者の比價は一定ではない。かくて彼は羅馬希臘以來の變遷を述べ、メキシコ及ベルの銀鑛發見は銀に對する金の價值を大ならしめたること、之に反してブラジルからの金の輸入は再び金の價值(市價)を下落せしめたることを述べる。(pp. 361 ff) 金の比價は時代によりて異ると共に又國によりても異なる。日本に於ては金の價值は八對一であり、支那に於ては十對一である。歐洲に於ては、ブラジルよりの金の輸入が繼續するならば、その割合は又十對一になると思はれる。(p. 365) 而して諸國に於ける金銀の市價は互に影響する、外國市場が金銀の價格に及ぼす影響は他の如何なる物の價格に對する影響よりも強い、その故は、金銀程

運送に容易に、又毀損しないものはないからである。(p. 369) 英蘭と日本との間に貿易が開け、之が繼續する時は、英蘭の銀は日本に到り、日本の金は英蘭に來り、以て日本に於ける金銀の比價は英國の夫と同じくなるであらう、只運送の費用及危險に應ずる差異が残るのみであらう。近隣の諸國間に於ては、此差異が殆どない。(pp. 369 ff)

カンチロンは、斯の如く金銀の市價の變動を述べたる後貨幣論上の一の重要な學說に及ぶ、即ち金銀貨の法定比價は此市價に従はねばならないと云ふことである。『金と銀との價値の比例を決定するものは市場價格である、換言すれば、市場價格は、鑄造金銀貨に人の興へる價値の比例の基礎となるものである。若しも市場價格が著しく變る時は、市場の法則に従ふ爲鑄貨の價格を改正しなければならぬ、若し之を怠る時は、流通の上に混亂と無秩序が生ずるに至る、即ち人は、何れか一方の金屬を、貨幣に於て定めてある以上の高い價格で取ることになる。』(pp. 371—372) 彼は此例として當時の英蘭の例を掲げる、即ち金に對する銀の市價が騰し、市價の比率が法定の比率を異るに至りて、銀貨は國外に流出し、一七二八年<sup>(3)</sup>其流通量は著しく少くなり、終に世人は一ギニーを兩替するに

約5%の損をするに至つた、此國亂が Sir Isaac Newton をして、之が改善に關する報告を草せしむるに至つた。(pp. 372—374) カンチロンの意見によると、此國亂に應ずる道は、銀の市價騰貴に應じて銀貨を輕くすることである、然るにニュートンは反對の方法、即ち金貨の額面價額を法律に依て引下げた。(一ギニー金貨を二十一志六片より二十一志に併しカンチロンに従へば、銀貨の價格を引上げた方が自然的である、蓋し其市價は既に騰貴してゐるからである。又金貨の額面價額を下げる時は、從來の率を以て外國より借りたる資本を返還する場合に、より多くのギニーを支拂ふこととなり英蘭の損である。(p. 373) (4) カンチロンは此問題に就てニュートンと意見を交換し、ニュートンは彼の反對に答へて、銀貨こそ眞の且唯一の貨幣であつて、之を變更することは出来ないと言つたと告げてゐる。(p. 377) (5)

次に第五章、彼は、貨幣額面價額の増減が、物價に及ぼす影響を述べる。今佛蘭西が現に五リールとして通用する銀一オンスの名目を漸次減じて二十ヶ月の後、四リールに至らしむる法令を發布したりとせよ。負債を有する者は其支拂を急ぐべく、企業者製造家の資本の調達は容易となり、企業の濫設となり、貨

幣を手離して商品を買はんとする需要の増加は商品の騰貴を來し、其結果、外國商品の輸入となる。此等の事は凡て貨幣流通の速度を大にし、これが又凡ての價格を騰貴せしめ、佛蘭西の輸出は減ずる。その結果は佛蘭西より外國に對し多額の貿易差額を正貨にて支拂ふの必要となる。佛蘭西の對外爲替は不利となる。且、事情に通ずる者は銀を貯藏することを努め、此等種々の原因は國內の貨幣を少くする。貨幣の減少は商品の價格を下落せしめる。此際佛蘭西王が再び銀貨の名目を引上げて五リールとし、新貨幣を鑄造したりとする。此新貨幣の鑄造は佛蘭西内の貨幣を名目低下前より多くするには足らない。何となれば貯藏されたる銀、外國に出たる銀が莫大であるからである。尤も佛蘭西の物價下落は輸出を促進するが、此輸出商品は名目下落當時外國より高く仕入れたものであつて、今之を安價に輸出するも、之によつて國外に出た丈の貨幣が佛蘭西にもどることは困難である。これすなはち物價が名目低下前に比較して安い原因であつて、名目の引上があつて尙且、物價安きことは、一國內に流通する貨幣量及其速度が物價を決定すると云ふ既述の學說を破壊するものでもなく又弱めるものでもない、何となれば現實の貨幣の流通量が少いからであると。

(pp. 381—393) 最後に彼は貨幣額面價額の變更に關する歴史的敘述を附加する。

註(1) Smith, op. cit. Bk. IV. Ch. VII pt. 1. Cannan's ed. Vol. II. p. 65; Bk. I. Ch. IV. Vol. I. p. 30

(2) 明治日本に於ける金銀の比價は八對一にして支那に於ては十對一又は十二對一であるからなる。(Bk. I. Ch. XI. pt. III. Cannan's ed. Vol. I. p. 211)

(3) 此年數は明に誤謬なるもの、ヤキンスが指摘した、何れにせよ、ニダートンは一七二七年に歿したのみならず、ニダートンの報告は一七二七年に出たからである。(Levons, Richard Cantillon, p. 181)

(4) A Letter balancing the Causes of the present Scarcity of our Silver Coin etc. by the Earl of Powis (Corbyn Morris) London, 1757 にもカンチロンも同一の意見が發表せられてゐる。

(5) かつて曰へ “Silver only, and not gold, is the standard of our money.” (J. Harris, Essay upon Money and Coins, p. 84)

ヤキンスはニダートンの此言(カンチロンの傳へる)を捉へて、ニダートンは決して複本位論者にあらざるものゝ斷じ、以てニダートンを復本位制の創始者なりとする論者に答へた。ヤキンス前掲論文百七十五頁及 Investigation in Currency and Finance, London 1909 中に在る Sir Isaac Newton and Bimetallism なる論文、並にヤキンスの論敵 Dana Horton の著 Sir Isaac Newton and England's Prohibitive Tariff upon Silver Money, Cincinnati, 1881 を參照

## 十九、銀行

カンチロンが最後の三章に述べる所は、銀行論である。Legrand は銀行に關する彼の説を John Law の説とを比較評論してゐるが、(Legrand, op. cit. pp. 147 ff) 茲に

は、只二三の點に就て彼の説を紹介するに止めらる。

彼は云ふ——銀行は預金として拂込まれたる金額例へば十萬オンスの銀の中金庫に貯藏し置く金額は約一萬オンスであつて、殘額九萬オンスは他に貸與することが出来る、蓋し經驗によるに、一千オンスの拂戻を要求する者ある時は、他方一千オンスを預入れる者があるからである。併し銀行の金庫に貯藏し置くべき率は一定でない。銀行の信用の外に顧客の職業によつて異なる、或場合には半額を要することがあり、巨額の預入を爲すと共に又忽ち巨額を引出す企業家や商人を顧客とする銀行は三分二を順備し置くを要することがある。銀行にとりて最も都合よい顧客は常に自己の現金を確實に利用しようとする金満家である。(pp. 397 ff.)

次に彼は銀行券、小切手、振替に言及し、銀行の效用は、貨幣が流通外に多額に貯藏さるゝことを避け従て貨幣の流通を促進する所に在ると云つてゐる。(p. 405) 併し一國の爲には貨幣の流通を寧ろ緩にすることの利益あることをカンチロンは忘れてゐない。(p. 408) 信用の過大なる膨脹従て銀行の幣害に就ては次の如く云つてゐる。『假想的の貨幣 d'argent fictif et imaginaire の豊富は流通上の眞の貨



幣の増加と同様の不利益を起す、すなはち土地及勞働の價格を引上げ、或は、結局損失せしむるの危險を以て、製品類を騰貴せしめる、併し斯の如き砂上樓閣的の富裕状態は、一たび信用に動搖を生ずる時、忽にして、消散し、困亂を激發せしめるものである』と。(p. 413) カンチロン自身は、Law の紙幣によつて一舉にして數萬金を得たと傳へらるゝことに、思ひ合せると此一節は興味がある。彼のベニス銀行、英蘭銀行等の事業經營に關する説明は、彼が實際の綿密な觀察者であつたことを示してゐるが、今此等の紹介は省略する。

## 二十、結語——フキジオクラット及其他の

### 學者とカンチロン

『商業一般論』に於てカンチロンの述る所の重要點は以上敘述せる通りである。筆者は又同時に、カンチロンが其當時の學者に及ぼした影響の一部を示し、而して又、經濟學史上カンチロンの占むる地位に關して多少の暗示を與へ得たと信ずるが、今本稿を終るに當り、一つの結論として、更に之を一括して置く必要があるであらうと思ふ。

先づカンチロンとフキジオフラットとの關係に言及するに當つて、特にミラボーとの關係を述ぶる必要がある。蓋し歐羅巴の讀書界は特にミラボーの「人類の友」によつて、廣くカンチロンの書を知るに至つたであらうし、又ミラボーの此本とカンチロンのエッセイとの關係は前に述るが如き密接なものであつたからである。

ミラボーが「其人類の友」に於て告る所によると、彼は最初、原稿の形に於て所有した「或卓越せる勞作」(un Ouvrage excellent)の自由な注釋の形をもつて、その書の發行を企てたが、其第三篇を始める前に、此原稿本は終に公刊されたが爲に、計畫を變更して、自己の原稿を集めて上梓するに至つたと云ふのである、而して彼の云へる卓越せる勞作とは、カンチロンのエッセイである。(L'Ami, t. I, pp. 9—10)カンチロンを評して、彼は、“un des plus habiles hommes et des plus profonds Ecrivains” (t. I, Ch. II, p. 40) “le plus habile homme sur ces matières qui ait paru.” (t. I, Ch. VII, p. 154)と云ひ、又カンチロンの凡ての原則を採つたと告白してゐる。(t. I, Ch. III, p. 53) Stephen Bauer は「巴里の Archives nationales」の中で、カンチロンのエッセイの筆寫に、ミラボーの手を加へたものを發見した。此寫本を研究したヒッグスによると、

それはカンチロンの忠實な筆寫ではなく、剩へ、ミラボーは其眞の著者を隠蔽する爲と思はれる色々の加工をした形跡があつて、ヒッグスはミラボーの動機は全く不正直と云ふ外なしと斷じた。一方、*Mémoire sur la population*なる原稿の中には、ミラボーは眞の著者を明にして、之にあらゆる讃辭を呈し、(*un manuscrit rare, unique reste des travaux immenses d'un des plus habiles hommes que l'Europe ait produit.*) 此原稿が或不正な方法(*une espèce de vol*)に由て、彼の手に入つた事、自身之に加筆せんと企てたが、終に不可能を悟つて、此計畫を抛棄し、之を基礎として特別の表題の下に獨立の本(*L'Ami des Hommes*)を公刊する事にしたことを更に告白してゐる。ヒッグスが詳しく紹介した此ミラボーの原稿はカンチロンの人物に就て興味ある材料を提供したものであるが、今其詳細なる紹介を略する。(1)

ミラボーがカンチロンを最初傾倒的に尊信したことは以上の所で解るが、併し、人口に關するミラボーの説は、彼がカンチロンを正解しなかつたことを示してゐる。ミラボーはケネーと會見して初めて、その蒙を啓くを得たと云つて居るが、ミラボーの蒙はカンチロンの責任ではない。一七六七年七月三十日ミラボーは *Sint Maur* より、*ルソー* に書を送つて、*フキジオ* クラットの教義を説き、その

中に、カンチロンの書によつて、人口論に關する最初の思想を得たが、ケネーと最初の會見をなすに至つて、彼はその説の變更を爲すに至つた事を述べて居る。此書翰は、ミラボーが如何にして、フキジオクラシーに歸依するに至つたかを示すものとして、又、カンチロンの書が、ミラボー、ケネー兩者の結縁について、如何なる役割を演じたかを示すものとして極めて興味深いものである。オンケンは其經濟學史に、此大部分を獨逸譯して掲げてゐるが、筆者は今、その關係部分を長文ながら佛蘭西原文のまゝ掲げて見る。(2)

“Je n'entends pas bien l'énunciation que vous me faites de vos difficultés sur nos principes de population ; je les crois néanmoins très-essentielles à débater, car si c'est ce que je pense, cette discussion est la clef et le noeud de toute la science économique. J'imagine que vous êtes dans les mêmes idées à cet égard que j'avais lorsque j'ai écrit mon Traité sur cette matière, qui fit tant de bruit alors. J'avais pris mes premières et uniques notions à cet égard dans l'Essai sur la nature du Commerce de M. Cantillon, que j'avais depuis seize ans en manuscrit. Cet auteur, beau génie d'ailleurs à bien des égards, élevé dans le commerce, n'avait fait par ses spéculations et ses recherches que perfectionner l'erreur éclose dans le dernier siècle que regarde le commerce comme

principe de richesse. En conséquence, j'avais, comme lui et tant d'autres, conclu, d'après la visibilité de la chose, que, puisque ma main mise devant mon oeil me cache le soleil, ma main est plus grande que le soleil. J'avais, dis-je, raisonné ainsi : Les richesses sont les fruits de la terre à l'usage de l'homme ; le travail de l'homme a seul le don de les multiplier. Ainsi plus il y aura d'hommes, plus il y aura de travail ; plus il y aura de travail, plus il y aura de richesses. La voie de prospérité donc est ; 1. De multiplier les hommes ; 2. par ces hommes, le travail productif ; 3. par ce travail, les richesses. En cet état je me trouvais invulnérable, et je papillotais à mon aise la décoration de mon édifice politique, des mariages, des lois somptuaires, que sais-je. Jamais Goliath, n'alla au combat avec tant de confiance que j'en eus pour aller chercher un homme qu'on m'apprit avoir emmargé sur mon livre ces audacieuses paroles : L'enfant a tété de mauvais lait ; la force de son tempérament le redresse souvent dans les résultats, mais il n'entend rien au principes. Mon critique ne me marchanda pas, et me dit tout net que j'avais mis la charrette avant les boeufs et que Cantillon, comme instituteur politique, n'était qu'un sot. Ce blasphème me fit regarder celui qui le proférait comme un fou, mais faisant réflexion qu'en toute dispute l'opinion respective marche d'ordinaire par représentailles, je me retins, rompis la conversation,

et, pour mon bonheur, je revins le soir questionner à tête reposée. Ce fut alors qu'on fendit le crâne à Goliath. Mon homme me pria de faire aux hommes le même honneur qu'on fait à des moutons, puisque qui veut augmenter son troupeau commence par augmenter ses pâturages. Je lui répondis que le mouton était cause seconde dans l'abondance, au lieu que l'homme était cause première dans la création des fruits. Il se mit à rire et me pria de me mieux expliquer et de lui dire si l'homme arrivant sur la terre avait apporté du pain dans sa poche pour vivre jusques au temps où la terre préparée, semée, couverte de moissons mûres, coupées, battues, etc, pût le nourrir. J'étais pris ; il fallait ou supposer que l'homme avait léché dix-huit mois sa patte, comme l'ours l'hiver dans sa tanière, ou avouer que ce créateur des fruits en avait trouvé en arrivant qu'il n'avait point semés. Il me pria alors de vouloir bien faire participer toute la population subséquente au même avantage, parce que également cela ne pouvait être autrement. La présomption une fois dérouterée dans un sot cause la confusion et la haine ; dans une âme honnête, elle opère la reconnaissance et la docilité. Ce fut mon cas.

カンチロンの人口論には、毫も生れ出る時ボケットにパンを携ふるの假定は含まれてゐない、却てカンチロンはマルサスの先驅者と稱せらるゝものである。

ミラボーはカンチロンに學んだと云ひながら、その學べるものは實は、古いマーカンチリスト的人口論に過ぎなかつた。右の書翰にある如く、ケネーまで、カンチロンを呼んで、un sot (愚物)と云つたか否か疑はしい、ケネーは前に述べる如く、その論文『穀物』に於て、カンチロンを明示引用せるものである。確實な事はミラボーがカンチロンを正解しなかつた事である。『人類の友』は矛盾撞着する多くの點を含んでゐる。(3)カンチロンに對する其あらゆる傾倒的讃辭を以てして、ミラボーは終にカンチロンの不肖の弟子たるを免れなかつた。

併しミラボーは斯の如くカンチロンを正解しなかつたにせよ、その思想、フホジオクラシーに歸依した後の彼の思想も、カンチロンの感化を受けること少なからざりしことは否定することは出来まい。クニースは、バーデン侯とミラボーとの往復文書の序文に、ミラボーが貨幣に關するマーカンチリスト的謬想を排撃する點並に農業と商工業との關係に關する根本見解は Boisgillebert 及 Cantillon を思はしむと云つた。(Die Bekämpfung merkantilistischer Ueitle über die Bedeutung des Geldes, verbunden mit dem Versuche, besondere Dienste des Geldes für Erleichterung des Tauschverkehrs zu würdigen, wie sie sich in Ch. VIII Travail et argent, aber auch durch das ganze Werk

verstreut finden, erinnern wie auch die Grundanschauungen Mirabeaus über die Verhältnissstellung zwischen der Bodenbewirtschaftung und den industriellen und handelsmännischen Geschäftsbetrieben nachdrücklich an Boisguillebert und an Cantillon.—C. Friedrichs von Baden brieflicher Verkehr mit Mirabeau und Du Pont, Bd. I. CXXIII)

又クニースは、ケネーの代りにミラポーをフキジオクラシーの創立者とするならば、更に遡つて、カンチロンこそ、これなりと云はなくてはならないであらうと云つた。(ibid., CXLII) 又同じ意味に於て、ゼボンス及びヒッグス等もカンチロンを経済學の搖籃、或はフキジオクラシーの父と呼んだのである。茲に於て問題は、フキジオクラットとカンチロンとの共通點はどこに在るか、と云ふ事になるが、此處に再びカンチロンの個々の言説を繰返す必要はあるまい。カンチロンの全卷に通じて見らるゝ土地(農業の尊重、及自由主義は明にフキジオクラットの的である。フキジオクラシーの創立者ケネーが、直接にカンチロンから、その根本思想の幾何を獲得したかを斷定的に言ふことは出来ないが、少くとも一ヶ所に於て彼はカンチロンを引用し、之に賛同した。デール(Daie)の如きは、更に進んで、ケネーの Maximes Générales 中有名な “La terre est l'unique source des richesses”



なる方式は、恐らくカンチロンから得たらしいと云つた。即ち彼は其編纂せる  
フキジオクラット全集に於てケネーの當該項に脚註を附し“Ce point fondamental  
de la doctrine de Quesnay paraît notamment emprunté à Cantillon, qui s'exprime ainsi.”<sup>(3)</sup>と云  
フセシ第一章を引用し、又、“Il en est de même de l'idée que le produit net territorial est le  
fond sur lequel vivent tous ceux qui n'appartiennent pas à la classe agricole.”<sup>(4)</sup>と云ひ、ハッセー  
第一篇第十二章の一節“*Il n'y a, que le prince et les propriétaires des terres qui vivent dans  
l'indépendance, etc.*”を引照した。<sup>(4)</sup>併しカンチロン卷頭の富の定義を見ると、彼は  
寧ろ土地偏重のケネーと、勞働偏重のミスに對して兩者を平等に尊重したと  
云ふのが正しい、從てケネーが此點に於てカンチロンに學んだと云ふのは、疑問  
になり得る。現にオンケン<sup>(5)</sup>は之を否定してゐる。<sup>(5)</sup>たゞ、カンチロンは一國に  
於ける農業の重要を強調し、地主階級の支出が他の階級を養ふことを力説せる  
點此點はケネーがカンチロンを引用して、同意せる所である<sup>(6)</sup>は確にケネーと相  
通ずる。此點は、カンチロンを依然マーカンチリストなりとするオンケンも認  
めてゐる所である。<sup>(6)</sup>ゼボンスもカンチロンの第一篇第十二章の一節、“*Tous  
les ordres et tous les hommes d'un état subsistent ou s'enrichissent aux dépens des propriétaires des*

“Terres.”を以て、フキジオクラット學說の萌芽なりと見てゐる。(7)

然らばカンチロンをフキジオクラットの中に入れ得るか如何。此處で筆者は此事を否認するオンケンの説を聞いて見る。(8)

オンケンは、カンチロンを以て尙大體、マーカンチリストなりと論斷す。其理由とする所は、第一に人口論に於てケネーとカンチロンには一致點なきのみならず、可也著しい衝突があること、第二にカンチロンには“Tableau economique(ケネーに表はされたる三階級(地主、農夫、商工業者)の區別が既に存在するが、之は毫もカンチロンの創見と見るを得ない、當時の英蘭の實情を見れば、何人も氣付きたる點である。次にケネーに於ては農夫が唯一の生産的階級であり、之に反して製造者は *classe sterile* として一般の福祉に對して重要でないのみならず、その存在過剰なる時は害惡を及ぼすものとせらるゝに反し、カンチロンに於ては製造者は、*ouvriers utiles à l'Etat* であり、第一篇第七章の表題に云ふ如く、“*La travail d'un laboureur vaut moins que celui d'un artisan.*”である、従てカンチロンの見解に従へば、政治家は農業人口の増加よりも都市人口の増加を圖る可きである、之れ全く非フキジオクラットの所である。第三にカンチロンによれば、農業にあらす、商業こそ國富の主

源である、殊に外國貿易がそうである。然るにケネーに於て、商業は必要なる害惡に過ぎない。茲にオンケンはエッセイ第三篇第一章末尾の一節を以て例證する。(9)又ケネーが土地產物に於ける積極的貿易製造品に於ける消極的貿易を以て商業政策の目標となしたるに反し、カンチロンは曰く“Cependant il ne serait pas avantageux de mettre l'Etat dans l'habitude annuelle d'envoyer chez l'étranger de grandes quantités de produit de son cru, pour en tirer le paiement en manufactures étrangères. Ce serait affaiblir et diminuer les habitants et les forces de l'Etat par le deux bouts” (p. 310) 又曰く“il faut encourager, tant qu'on peut, l'exportation des ouvrages et des manufactures de l'Etat, pour en retirer autant qu'il est possible, de l'or et l'argent en nature.” 云々。

右のオンケンの説に對しては、先づ一、二の誤を正す必要がある。先づ第一にエッセイ第一篇第七章の表題は、筆者の前に示した如く、(10) 賃銀が一に於て他よりも高いと云ふ意味であつて、社會的階級の何れが重要な問題とは全然異なる。又オンケンの云ふが如く、——筆者の見る所では——カンチロンが農業人口より都市人口の増加を欲したと認め得べき一節を發見し得ない。第二に、カンチロンが商業殊に外國貿易を以て國富の主源としたと云ふのは當らない。オン

ケンが其論據として引用するカンチロンの一節は、對外國家の勢力又は政策の上に於て外國貿易の重要なことを云ふものに過ぎない。此場合彼の眼中にあるものは彼の所謂比較的富である。富自體が何であるかは、エッセイ卷頭の一句が明瞭な言葉を以て道破してゐる。カンチロンには製造業を重んじ、農業を第二次視した所はない。彼に於ては食料の生産が先である、即ち彼は百人中、食料の生産に預らざる二十五人を如何に使用すべきの問題に答へて、之を製造業に使用することの最有用なことを云つてゐる、農業を壓して、製造業を尊ぶの意味は到底これを見出し得ない。(11)

併しオンケンの右の説は、カンチロンとフキジオクラシーの代表者とが尙少なからぬ思想上の相異を有することを指摘せるものであり、カンチロンをフキジオクラットの圏内に入ることの誤なることを示すものであるが、併し吾等は一步退いて問ふ、カンチロンがマーカンチリストなるか、將たフキジオクラットなるか、果して始めから問題となり得るかど。苟もカンチロンの書を一瞥するならば、そこにマーカンチリスト的思想とフキジオクラットの思想との並び存すること何人の眼にも明瞭である。オンケンが此點に於て論敵とするらし

きゼボンス及びヒッグスもカンチロンをフキジオクラットなりと論斷し去つた者ではない。共にカンチロンのフキジオクラット的思想に特別の興味を感じたのみである。而て學說史上カンチロンに就て興味があるのは、その時勢に先んじた卓見、即ち其フキジオクラットの論調であつて、マーカンチリストの餘臭でないことは勿論ではないか。オンケンは、ゼボンスの説として、“there is no taint of the mercantile Fallacy whatever in his theory”なる言葉を引用してゐるが、<sup>(12)</sup>併しゼボンスの此句はエッセイの第二篇第五章に述べたる貨幣の流入は一國の物價を騰貴せしめると云ふ説に關するものであり、且最後の言葉は“in his theory”ではなく、“in this theory”の誤である。恰もカンチロンは全書を通じてマーカンチリスト的色彩なしとゼボンスが斷じたかの如き印象を讀者に與へる危険があるが、ゼボンスの眞意はそうではない。彼は斯の如き否定をしてはゐない。ヒッグスに至つては明に“*He (Cantilón) did not, of course shake himself entirely free from contemporary prejudices. His suspicious anxiety for what may be called a balance of nutrition in foreign trade snacks of mercantilism in its latest phases and is of a piece with early doctrine.*”<sup>2)</sup>彼のマーカンチリスト的色彩を認めてゐる。<sup>(13)</sup>然るにも拘らずカンチロンは、

なほ、『フキジオクラシーの父』である。

カンチロンをフキジオクラットなりと云ひ得ないと同様に、又彼を、オンケンの如く、大體に於てマーカンチリストなりと斷ずることも出来ない。(14) オンケンがケネーを以て、カンチロンのフキジオクラットなりや否やを検する試金石とした如く、例へばトマス・マンを以て、彼のマーカンチリストなりや否やを決する標準とならば、カンチロンがマーカンチリストにあらざること、何人か疑をもたう。我等は精々、エッセイのマーカンチリスト的傾向を認め得るのみである。一人の學者を、如何なる學派に組入るべきかは、學史研究家にとつて、必しも最大の問題ではない。況んやカンチロンの場各に於ては、その不可能なること明瞭なるに於てをや。彼の學史上の地位はルグランの “un mercantiliste précurseur des physiocrates” なる言葉に表はされる。彼のマーカンチリスト的論調と、フキジオクラットの論調とは如何に調和さるべきの問題に就ても、ルグランの次の説をとる。(15)

“Les premiers (mercantilistes) ont voulu la nation forte par le commerce, les seconds (physiocrates) ont voulu l'humanité heureuse par l'agriculture. Cantillon veut voir son pays

heureux et fort. Nationaliste comme les premiers, voyant en la terre la richesse première comme les seconds; partisan de la balance du commerce comme un disciple de Mun, préoccupé du produit des terres comme élève de Quesnay, il résume en lui les parties essentielles de ces deux écoles.”

『前者(マーカンチリスト)は貿易によつて國家の強きを望み、後者(フキジオクラット)は農業によつて人類の幸福なるを望んだ。カンチロンは其國の幸福にして強大なるを望む。前者の如く、國家主義者ながら、後者の如く第一の富を土地に認め、Munの門下と同じく貿易切衝の味方であり、Quesnayの學徒と同じく、土地產物に傾倒し、正に此兩學派の重要部分を一身に具有する。』  
最後に、カンチロンが當時及び其後の學者に如何なる程度に於て知られてゐたかに就て、既述の所に多少の追補を試みたいと思ふ。

前に述べるが如く、Postlethwaytは其 Dictionary of Trade and Commerce に於て、其出所を明示せずして、明にエッセイを利用した。(本稿一、註(6)參照)而て此辭書第一卷は一七五一年の出版であり、其第二卷は一七五五年の出版であるが故に、利用されるエッセイは英語の寫本(又は原稿)でなかつたらうかと推せられる。此事は

前に述べる如く、キャナンの指摘した所である。今筆者の比較して見た所では、『辭書』の編者は明に次の諸點でエッセイに學んでゐる。(筆者の氣付いた點のみをあげる)

先づ鑄貨(Coin)の卷に於て曰く“*In Japan, the proportion of Gold to silver is 1 to 8, in China 1 to 10, in the Mongol Empire 1 to 12 etc.*” (Dictionary, Vol. I (1751) p. 527) ニエー  
トンの改革に對する意見皆カンチロンによることを明瞭である。(pp. 527—)金銀  
貨の比例は市場に依て決定するものと云ふ說亦同様である。“*there was no other rule  
but the market-price whereby to find their proportion.*” (p. 528) 勞働の種類による貨銀の  
自然的相異の說 (Vol. II. p. 1) 價值說 (Vol. I. p. 1) —Par of land and labour—一國に勞  
働多ければ一國は富むる云ふ說 (the more labour there is in a state, the richer the state is  
esteemed. —Vol. II. p. 6) 貨幣の流通量と物價との關係 (Vol. II. pp. 283 ff.) 皆カンチ  
ロンによる。

同じ著者の *Great Britains' True System*, London MDCCLVII も多くの點にてエッセ  
イの燒直である。先づエッセイの第二篇第三章にある三ラメントの說貨幣の流  
通量に關する説明等殆ど逐字的にエッセイによる。(System, pp. 57 ff.) 貨幣の増加



と物價との關係に關する説明亦大體エッセイに基く、(pp. 204 ff.) エッセイの第一篇第十一章(土地と勞働との均衡殆ど全部) (p. 148 以下) をとり、第十章よりカシクロンのブリュセルのレースの例、時計のゼイマイの例、河水の例等をとり來る、(pp. 154—155) 更にエッセイの第一篇第十六章は百五十六頁以下に包含され、Corps de Reserve なるカンチロンの用ひた佛語をそのまゝ佛語で用ひてゐる。著者は屢々ロック、ダベナント及デッカーの名を掲げながらカンチロンの名を擧げない。

フキジオクラットの方面に於て、Gournay は——L'abbé Morellet の云ふ所による——カンチロンのエッセイの閱讀を薦めたと傳へらるゝ。 “Il fit surtout lire beaucoup l'Essai sur le commerce en general par Cantillon, ouvrage excellent qu'on négligeait.” (Mémoires de l'abbé Morellet Paris 1823 t. I. p. 38 Cf. Palgrave, Dictionary, Art. Cantillon)

チュルゴーがカンチロンを尊重した事は、Caillard に興ゐる一七七一年一月一日の書翰が之を示してゐる。 “Un homme qui est venu au monde après Montesquieu, Hume, Cantillon, Quesnay, M. de Gournay, etc., est moins frappé de ce mérite qu'a eu M. Melon de venir le premier, parce qu'il ne le seul pas.” (Ouvres. ed. Daire t. II. p. 819)

Du Pont de Nemours 著其 Notice Abrégée des différents Ecrits modernes qui ont concouru en France à former la Science de l'économie politique (Ephemerides du Citoyen 1769, t. I) にカンチロンの書を掲げた。(p. XVI)

コンチヤンは貨幣の流通に關する一章 (Condillac, Le Commerce et la Gouvernement, 1776, 1. pt. Ch. XVII) 其他に就てカンチロンに負ふことを明言した。(本稿十二註⑥ 參照) “J'ai tiré de cet Ouvrage le fond de ce Chapitre, et plusieurs observations dont j'ai fait usage dans d'autres. C'est sur cette matière un des meilleurs Ouvrages que je connoisse : mais je ne les connois pas tous à beaucoup près.” (p. 143 note) 個々の場合に於て彼はカンチロンに負ふ旨を明にこなかつたが、都市の成立に關する一章 (1. pt. Ch. XI) 爲替の説明 (1. pt. Ch. XVII) 銀行の爲替思惑の説明 (pp. 170—171) 利子の章では (pt. 1 Dd, XVIII) 富める財産家地主の多額の出費が利子を高くすること、及其反對の場合の説明 (pp. 187—8) 利子法定に關する説 (on éludera ses réglemens dans des Marchés Clancieux, prêteront avec moins de sûreté. p. 191) 事業の危險に應じて利子高きことの説明 (カンチロンと同じく) 巴里 Halle 魚商の例を用ゐ (pp. 192—193) 支那の人口に關する

説明(p. 281)佛蘭西のシャンパーニュとブリュッセルの貿易の例(此處ではエッセイに據る旨を明示す、pp. 302—303)等屢々カンチロンと同一の言葉を以て説く。

Graumann は Horton の指摘せる如く、(Sir Isaac Newton etc., 本稿十八註⑤参照)ニュートンの報告に對するカンチロンの批評を掲げたのみならず、其他の點に於てもカンチロンに負ふこと少なからず(本稿十、註②)参照例へば金銀の比價に關する説明はカンチロンより數頁を逐字的に翻譯し來る。(Gesammelte Briefe von dem Gelde etc., Berlin, 1762, ss. 26—27)

Harris は既にギボンスの云ふが如く著しくエッセイに負ひ、而も此事を明言しながら“Land and labour together are the sources of all wealth.” (An Essay upon Money and Coins, London MDCCCLVII, p. 2)の云ふ所より物の價值(intrinsic value)が土地と勞働によつて決定するを説明(p. 5)“Things in general are valued, not according to their real uses in supplying the necessities of men; but rather in proportion to the land, labour and skill that are requisite to produce them.”進んで勞働の價值に關する説“‘It may be reasonably allowed, that a labouring man ought to earn at least, twice as much as will maintain himself in ordinary

food and clothing; that he may be enabled to breed up children, pay rent for a small dwelling, find himself in necessary utensils etc..” p. 10 更に賃銀の相異に關する説 “In like manner, those professions that require genius, great confidence, a liberal education, etc. have a right to be rewarded proportionably” (p. 13) に至るまで明にエッセイに負ふものと見られる。

Condorcet も亦カンチロンを知つた、即ち其ポルテール全集(一七八五年版)中政治立法の部に序文を附して曰く “Lorsque l'Esprit des Lois parut, en 1750, les ouvrages de Melon, de Dutoy, et surtout celui de Cantillon sur le commerce, enfin quelques-uns des écrits de l'abbé de Saint-Pierre, étaient les seuls livres français, sur les science politiques, qui fussent entre les mains des gens de lettres” (Oeuvres de Condorcet, Paris, 1847 t. IV. p. 246)——尤もノン・ド・ルセーはカンチロン及モンテスキエの著書公刊の年に就て明に誤つた。

註(一) Higgs, Richard Cantillon (Economic Journal Vol. I.) pp. 264ff; Archives Nationales に藏するケネー及モンテスキエの原稿及手記の目録及其一部の抜萃は Les Manuscrits économiques de F. Quesnay et du Marquis de Mirabeau par G. Wenllesse, Paris, 1910 をいつてゐる。但しカンチロンの關係原稿は抜萃してゐない。

(a) Oncken, Geschichte ss. 318ff. 及び Loménie, Les Mirabeau, Paris, 1879. t. II. pp. 171-2 參照。此書籍は Strecken-Mouton, J. J. Rousseau, ses amis et ses ennemis, Paris, 1865 tome II. pp. 365-367 まで轉載す。

(c) Oncken, Geschichte s. 319 參照。カンチロンとケネーの人口論の比較に就いては Landry, Les Idées de Quesnay

sur la population, 1909, pp. 43—を 見 る。

- (4) Physiocrates, Quesnay etc., Paris, 1846, p. 82) ミールはミルギヤを語して son remarquable Essai を引いた (p. 74 note)

- (5) Oncken, *ibid.*, s. 278

- (6) Oncken, *ibid.*, s. 278

- (7) Jevons, *ibid.*, p. 170

- (8) 此處に述べる所は Oncken, Entstehen und Werden der physiokratischen Theorie in der Vierteljahrsschrift für Staats- und Volkswirtschaft, für Literatur und Geschichte d. Staatswissenschaften, (Bd. V. III. Heft, ss. 280—281) に於ける、又オントケンの經濟學史二百七十七頁以下参照

- (9) 本稿十六参照

- (10) 本稿五参照

- (11) 本稿九参照

- (12) Oncken, Entstehen etc., s. 281; Geschichte, s. 277 Jevons, *op. cit.*, p. 171

- (13) Higgs, C's Place etc. Quarterly Journal of Economics, Vol. VI, pp. 448—449

- (14) Oberfohren, Die Idee d. Universalökonomie in d. französischen wirtschaftswissenschaftlichen Literature bis auf Turgot, Jena, 1915, ss. 124—126 は全然オントケンに賛同してゐる。

- (15) Lagrand, R. Cantillon, p. 163 尙前に記するミルギヤを落したが、ロッシヤは其經濟學史に於て、ケネーの最初の經濟學的勞作(一七五六年)以前に出たるカンチロンのエッセイはケネーの要點、及主要功績の多くの既に極めて完成した形に於て包有するなした。(Roscher, Geschichte d. Nationalökonomik in Deutschland, München, 1874, s. 481)